

「洗濯物と戦車と」

泉 諒

あの町のことを思い出すと
いつも戦車が浮かぶ

住宅街のまんなかに
本当に戦車が置いてあって
しかもそれが、
まるでベンチのような顔でそこにいた

子どもたちはその上で遊び
サッカー少年のシュートが横腹に当たると
ボンと鈍い音がしていた

すぐそばには小さな資料館があり
錆びた飯盒、焼けた時計、笑わない写真が
ガラスの中で眠っていた

外はただの青空
戦車の陰で鳩が羽を休めていた

町には坂が多く
“のぼると世界が変わる坂”があった

その坂をのぼると
川が流れていて
人の気配がないのに
誰かがいるような風が吹いていた

川の脇には詩碑が建っていた
文字はかすれ
意味はわからなかったけれど
誰かが毎朝手を合わせていた

春には、白い花が

そこかしこに咲いていた

歩道も庭先もその匂いで満ちて

風が吹くと 甘かった

町のパン屋には

「今日は当たりのあんぱんです」と

手書きの紙が忍ばせてあった

夏の空き地では

誰も主催していないお祭りがあった

ただ人が集まって

なんとなく笑って

やがて帰っていった

名前のないイベント

けれどそれがこの町にはよく似合っていた

団地もあれば

タワーマンションもあった

神社のすぐ隣に

古本屋とカフェが並んでいて

どちらにも猫がいた

猫たちは車に乗るとき

左右を確認してから

慎重にボンネットへと飛び乗った

町の全体が

なにかに気をつかっているようで

でも誰も何も言わなかった

駅前では

お地藏さんに帽子をかぶせる風習があり

ときどきカウボーイハットの日もあった

その横を

中学生が笑いながら走り抜けていく
制服のすそが風でひるがえった

あの町は

全部がいつしよだった

戦車と洗濯物

詩碑と果物の香り

カセットラジオの昭和歌謡と

無言のすべり台と

昼寝している誰かの足音

どれが主役でもなく

ぜんぶが平らに

今日という日を生きていた

わたしがその町を出る日

川沿いのベンチに

ひとことだけ紙が残されていた

「また、春が来るよ」

なぜかそれが

あの町の全部の声に思えた